

本日の学び:「神の導きと派遣」 テキスト:マタイ2章9～12節

【理解の手がかりとして】

「東の国の学者たち」——私たちは彼らを「3 人」と考えてきた。しかし聖書には明記されていない。最初の頃は「12 人」という伝説もあったそう(完全数)だが、「黄金、乳香、没薬」(マタイ 2:11)という三種類の贈り物から、「3 人」と考えられてきた。

【黄金】——時代を超えて価値があり続けるもの。「金属の王様」とも言われるもので、贈り物としてこんなにふさわしいものはないと思われる。しかし家畜小屋の飼い葉桶の中に寝かせられた幼な子にささげられた「黄金」、その決して調和することのない対照的な存在の中に、この「黄金」をささげた学者の深い思いを見る。この「黄金」には色々な意味を見出す。それは言うまでもなく、最上級の敬意と祝福の表われ。最上のものをささげる、そこに祝福の思いが込められている。

しかしある王は、自分の何らかのお祝いの度毎に、民衆から貢ぎ物を要求することがあったであろう。民衆から絞り上げた金銀で、私腹を肥やし、さらに高価にものを要求する、そんな強いられた祝福ではなくて、この学者は、この「黄金」を真実に用いてくださる、それは自らの権力のためにではなく、民のために、虐げられている者のために、解放のために、慰めのために真実な仕方で用いてくださる、そういうお方だ、という思いをも含まれている、私はそう思う。

「黄金」とは、使う人間によっては全く違うものになってしまう。「まことの王」とは、真実に「黄金」を用いてくださる方、そう言えるのではないか。

【乳香】——乳香はヘブライ語で「レボナー」という。「白い」という意味。そのまま白色の香料だそう。アラビア半島やアフリカ東部に生育する、12メートルの高さにもなる樹から採取した香りの高い樹液から作るそうである。

この乳香は聖書の中でどのように用いられているかというと、神殿の中で、礼拝と犠牲がささげられるときに用いられた。「穀物の献げ物を主にささげるときは、上等の小麦粉を献げ物としなさい。奉納者がそれにオリーブ油を注ぎ、更に乳香を載せ、アロンの子らである祭司たちのもとに持って行くと、祭司の一人がその中からオリーブ油のかかった上等の小麦粉一つかみと乳香全部を取り、しるしとして祭壇で燃やして煙にする。これが燃やして主にささげる宥めの香りである」(レビ2:1-2)とある。これは収穫感謝の儀式であり、これを執り行うことが出来るのは祭司のみであった。

祭司の務めは、人が神のもとへ行く道を開くことにある。これは人が神のようになる、ということではない。むしろその反対。神の前に正しい関係に立たせられるということ。祭司という言葉のラテン語は「ポンティフェクス」と言って「橋をかける人」という意味を成す。祭司の働きは神と人との間に橋を架ける人という意味なのである。

「乳香」が捧げられたのは、まさに「この幼な子こそまことの祭司である」という告白であろう。「黄金」が「まことの王」としての告白であるとすれば、「乳香」は「まことの祭司」、すなわち、「この人こそ、神と人との間に橋を架けて下さる方なのだ」という告白なのである。そしてその通り、イエス様は神に通じる道を開いてくださった。私たちが神の御前に出ることが出来る道が、幼な子イエスから始まったのである。

「没薬」——これは漢字を見ると、「没」すなわち、何かに終りが来たことを表す漢字が使われている。その通り「没薬」とは死者への贈り物である。「没薬」と訳されたヘブライ語は「モール」と言い「苦い」という意味である。ミルラという背の低い樹から採れる液体を乾かして作る薬。この樹は、ユダヤの人々にとっては高価な輸入品だったそう。

ミルラの樹から作られた「没薬」は、イエス・キリストの生涯のはじめと終りに関係している。その誕生の時には、東の国の学者がこれをささげたわけだが、ニコデモは、イエス様の埋葬のために没薬を持ってきた(ヨハネ 19:39)。「没薬」は死体にぬるためのものであったから。その没薬を誕生の際に献げ物として贈られたことは、まさにその後のイエス様の生涯を指し示している。まさにイエス様は死ぬためにこの世に来られたのである。——ホルマン・ハントが書いた絵の中に次のような光景がある。それには、大工の店先にいる少年時代のイエスが描かれている。時は日没、低い腰掛けの上で長い間ちぢめていた足を伸ばそうとして、イエスは戸口に出てきた。腕を伸ばして立つイエスの後ろの壁に、入日が十字架の影を落とす。背景に立つマリアの目には恐怖がありありと見える。十字架の影に、来るべき悲劇を見るからである。そんな絵であるそう。

彼ら学者たちの目には、飼葉桶のキリストは、まさに「まことの王」であられ、「まことの祭司」であられ、そして「死から解放するために死に向かわれた人」として映っていたのかもしれない。

この「東の国の学者たち」は、カスパー、メルキオール、バルタザールという名で呼ばれてきた。それらの頭文字をとって、「C+M+B」という記号が、信者の家々を守るために家の玄関などの梁に刻まれる習慣があったそう。そしてこの名前は「Christus Mansionem Benedicat(クリストゥス・マンシオネム・ベネディカート)」という言葉に読みかえられて、信者の平安を祈る言葉として唱えられたそう。その意味は、「キリストがこの家を祝福して下さいますように」である。

『聖書教育』より

「学者たちの決断と行動は『恐れることはない。神の導きに従おう。来た道とは違う、別の道を通っても大丈夫だ。勇気をもって踏み出そう』と、私たちの信仰の歩みを励ましているようです。」(聖書の学び～別の道を通る)

「学者たちが幼子を拝する旅は、神に招かれ集い、再び遣わされる私たちの礼拝式のようです。礼拝式の終わりに派遣を受けた私たちは、それぞれの生活の場で福音を分かち合うように送り出されます。」(聖書の学び～学者たちの旅に見る「招きと派遣」)